

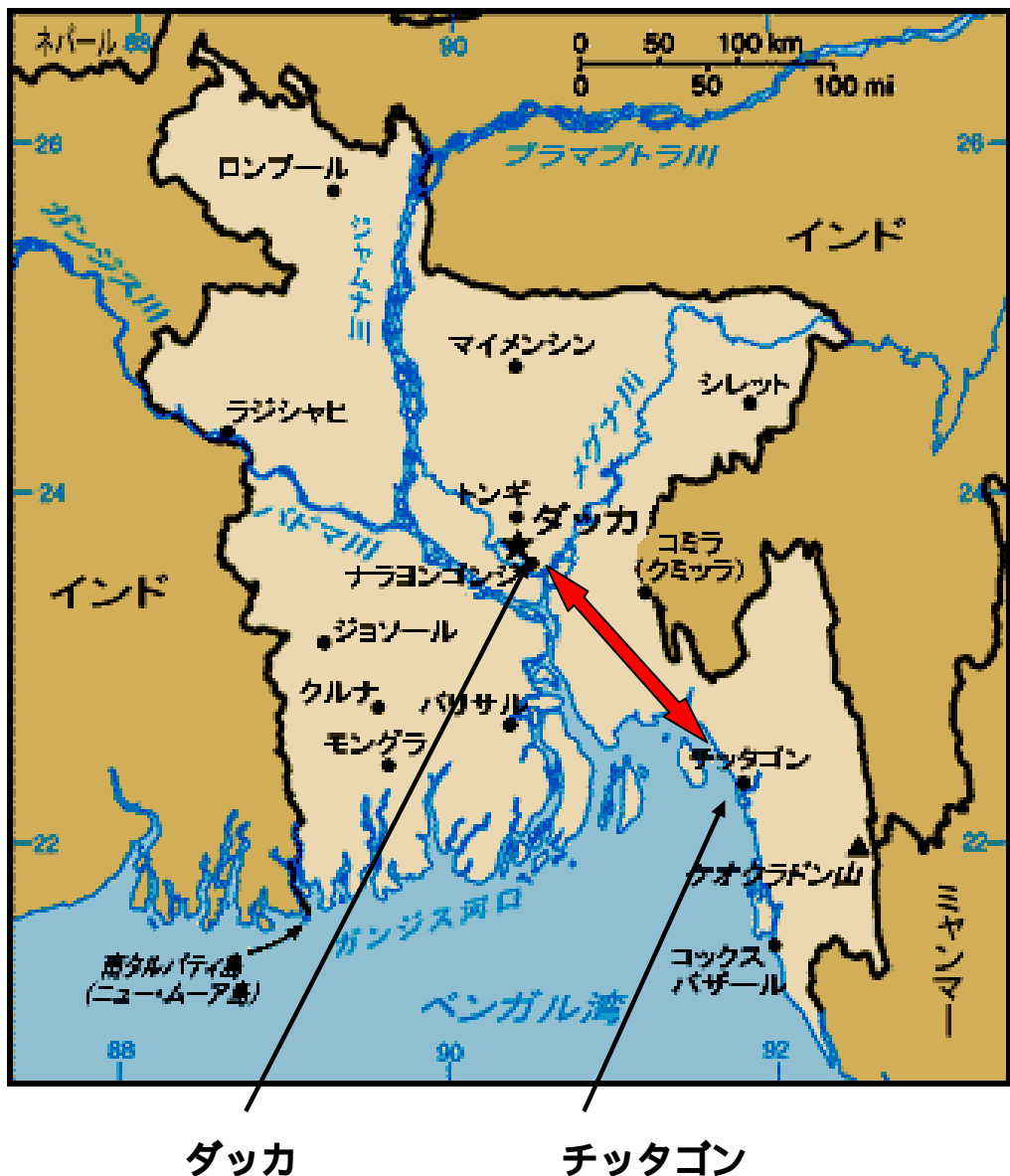
バングラデシュ（1988年）

1 ダッカへ

ビルマ造船所建設のプロジェクトが凍結したあと、1988年にバングラデシュへ行った。チッタゴン造船所のリハビリ調査を行うためである。

首都ダッカの空港に到着し、入国手続き後、一歩空港の外へ出ると群衆の波が寄せてきた。我先にと旅客のトランクに手をかけ、運搬を手伝おうとする。

“**Don't touch it! Sawaruna! Sawaruna!**”と言いながら、私は自分のトランクを握りしめ、人混みを掻き分け迎えの車に乗り込んだ。不慣れな同行者はこの歓迎を受け、汗を拭きながら唾然としていた。ひどい国に来たなという後悔の念が彼の顔に浮かんでいた。



2 ダッカで

シェラトンホテルに投宿した。立派なホテルで、エアコン完備、快適である。

バイキングレストランにはエビの寿司など日本料理も並んでいる。イスラムの国なので、酒は御法度だが、外国人の泊まるホテルでは許される。缶ビールは500円と高いが、じりじりと照りつける太陽の下を歩くと、割高なビールでも我慢出来ない。



シェラトンホテル

ダッカの町並みは煉瓦造りのビルが並び、ビルマと比べ緑が少ない。下町は人で溢れ、庶民の足、"Rikisha"（人力車）が行き交う。屋台で売っている西瓜にはハエが群がり、果肉の赤にハエの黒が奇妙なコントラストをなしている。この西瓜はハエが群がるくらい美味しいのだというが、買って食べる気はしない。



ダッカの町

国営のチッタゴン造船所は鉄鋼公社の傘下にある。まず、鉄鋼公社のダッカ事務所を訪問し、キックオフミーティングを行った後、調査を開始した。



鉄鋼公社幹部と

つぎに、現地調査のためバングラデシュ航空に乗り、造船所のあるチッタゴンへ向かった。貧国の航空機なので、もし、事故が起きたらどれだけ補償をしてくれるかなと心配しながら。

3 チッタゴンにて

チッタゴンはダッカの南、約200 kmに位置し、ベンガル湾に面したバングラデシュ最大の港湾都市である。寄港する外国船も多く、それらを修理する目的でチッタゴン造船所が造られた。しかし、経営は厳しく、新規需要の掘り起こしや設備の改善などリハビリ調査をおこなうため、約1ヶ月この町に滞在した。



チッタゴン造船所

3 - 1 イスラムの国

バングラデシュはイスラム教、彼らとの付き合いは初めての経験である。休日は金曜日、違和感を禁じ得ない。ラマダン（断食）がある。その期間は何も食べない、喫煙も駄目、とっていたが、そうではない。太陽が出ている間は断食し、早朝や夜間に喫食する。

造船所のオフィスでコーヒーを飲んでいると、顔見知りの技師が入ってきた。コーヒーを飲もうとするので、「今は断食の期間ではないか」というと、「人に見られなければよい」「外国人と一緒になら問題ない」とか言ってコーヒーを飲み、煙草を吸い始めた。彼はあまり信心深いイスラム教徒ではないようである。



造船所の技師達と

街のあちこちにモスクがある。1日5回、祈りを捧げるそうだ。勤務時間中も祈る。戒律厳しいイスラムの国はあまり生産的ではないように思える。

金曜日の休日、造船所の人から彼の家に招かれた。バングラデシュ料理の昼食を振る舞われたが、ビールは出てこない。ドアの向こうに黒いスカーフで顔を隠した奥さんやメイドらしき女性達が見え隠れする。しかし、我々の前に姿を見せることはなかった。

情報収集のため、関係官庁を訪問した。挨拶を交わし、名刺を手渡す。うっかり左手で渡した。左手は不浄と言われている。相手もわざとらしく、左手で名刺を差し出した。こちらのうっかりを咎めるように。以来、人に物を渡すときは右手を使うよう気を付けている。



リキシャ

3 - 2 ウイスキー

成田から持ち込んだウイスキーが底をついた。街に酒屋はない。ホテルで買えるが非常に高い。ブラックマーケットはないかとホテルのボーイに聞いた。「一寸待て」といってリキシャの運転手を連れてきた。案内してくれるようだ。一人では危ないと思い、同僚を誘いリキシャに乗り込んだ。狭い路地に入り、怪しげな家の前に来た。中からウイスキーと缶ビールのケースを抱えた男が出てきた。人に見られないように金を払い、ウイスキーとビールをリキシャに積み込み、一目散でホテルに戻った。

ホテルの部屋で飲むウイスキーとビールの減りが早い。どうもおかしい？ ダッカに駐在する商社マンの話を思い出す。通いのハウスメイドが調味料などを盗んで持ち帰るそうである。缶ビールにマジックインクで連番を付し、飲んだ日付を記入する **Beer List** を作り、よく見えるところに置いた。ウイスキーの瓶にはここまで飲んだと示す目盛りをつけ、日付を書き込んだ。この対策が功を奏し、ルームメイドによる盗難事件は解決した。

ブラックマーケットに出回るウイスキーなどは外国船の密輸によるものと思われる。外国船員はいろいろな品物を持ち込むようである。ホテルのフロント係からポルノ写真を買わないかと声をかけられた。彼らも生活がかかっているので、少し協力することにした。

3 - 3 ゴルフ

チッタゴン郊外の丘陵地帯に、18ホールのゴルフ場がある。金曜日の休みに仲間と出かけた。コースの状態は良くないが、ゴルフが出来れば幸せである。暑さに負けず、玉を打つ。草むらに転がったボールのそばに、熱帯特有の蛇がいた。黄色と黒の縞模様で、毒蛇に違いない。ゴルフクラブで追い払う。蛇に身震いしたあとは、やはりミスショットだった。

ビルマや中国と違い、チッタゴンのキャディは少年達である。仏教とイスラムとの違いがここにもある。チッタゴンの彼らは田舎育ちで純朴である。ダッカでもゴルフをしたが、都会慣れしたガキは始末が悪い。池のそばに子供が立ち、我々が近づいても動こうとしない。転がってきたはずのボールが見あたらない。子供をどかせると、彼に踏みつけられたボールが地面にめりこんでいた。1個のボールが貧しい彼らの食事に代わるのである。



チッタゴンゴルフクラブ (赤シャツが筆者)

ダッカゴルフ場でプレーしたときのことである。隣のホールと仕切っている林からライフルを構えた兵隊が突然出てきた。キャディが言うにはエルシャド大統領がプレー中らしい。警護の兵隊に囲まれた大統領らしき人物が遠くに見える。たまたま、我々がプレーするホールと大統領が向かうグリーンが共通グリーンになっていた。ミスショットをして、ライフルで撃ち返されたら大変である。我々は100ヤード離れたところで、大統領がホールアウトするのを眺めていた。

3 - 4 列車の旅

チッタゴンでの調査が終わり、ダッカへ帰るため空港に行った。しかし、エンジントラブルのため今日の便はキャンセルだという。明日はダッカで打ち合わせがある。チッタゴン駅に行き、運良くダッカ行きの急行列車に乗ることができた。飛行機なら1時間だが、これから6時間、列車の旅である。



チッタゴン駅にて

列車はガンジス河のデルタ地帯をひた走る。雨期なのか、低地なのか、周りの水田は水浸しである。点在する高床式の家々も没水し、あぜ道に渡した踏み板が唯一の出入り口となっている。

高台を走る車窓からは、煉瓦工場が見える。煉瓦を焼く窯の傍で、粘土をこねる人、不揃いで、いかにも質の悪そうな煉瓦を整理する人達の光景が広がっている。川岸では築堤のため、土砂を入れたざるを頭に乘せ運ぶ人の列や、舢舨に貨物を積み込む人たちが働いている。すべて人海戦術の手作業である。機械を買う金がなく、燃料も乏しい貧国の姿がそこにあった。

途中の駅で停車すると線路際から次々と物売りが現れる。不衛生だが、バナナとゆで卵なら大丈夫だろうと窓から金を払う。プラットフォームに転がる手足のない物体の横にはわずかなコインが入った洗面器が置かれている。治療を受けられず、手足を切断されても生き続ける彼の姿はまさしくバングラデシュの貧しさを象徴する光景である。

途中、貨物列車の脱線事故で臨時停車を余儀なくされ、列車は数時間遅れて真夜中のダッカ駅に到着した。

4 あとがき

現地調査と報告書の説明のため、バングラデシュを2回、訪問した。その間、貧しい国を実感し、イスラムの世界を見てきたが、あまりよい思い出は残っていない。従って、私にとってバングラデシュは“もう一度行ってみたい国”のリストには含まれない国である。